

「青い鳥」 (中島有香)

[おすすめしたい本：重松清『青い鳥』]

中学の非常勤講師である村内先生は、言葉がつかえてしまう。吃音という症状で、国語の先生なのにうまく話すことができない。でも村内先生は、生徒に笑われてもばかにされても、笑顔で生徒達を見守る。先生には、国語の授業よりもっと、大切な仕事があるからだ。

村内先生が、本当に大切なことは何かを教えてくれる物語『青い鳥』。私の中でも「拝啓ねずみ大王さま」という話が心に残っている。父親の自殺をきっかけに心を閉ざし、クラスになじめなくなってしまった少年が、村内先生との出合いやムカデ競争を機に、心を開いていく話だ。

クラスメイトと関わろうとしない少年を、村内先生は決してひとりぼっちにはしない。私にはこの少年が経験したような辛い出来事はなかったけれど、自分の気持ちを表現したり、初対面の人と話したりすることがとても苦手で、高校での友達づくりにとても苦労した思い出がある。しかし、その時期に『青い鳥』を読んで、「村内先生のように自分を見守ってくれている人はいる」「自分はひとりじゃない」と感じることができた。この作品は、読者の心に寄り添い、勇気やあたたかさを与えてくれる作品だと思う。

授業よりも大切なことは何か。村内先生が伝えたかったことは何か。村内先生の言葉を聞いて、悩みや葛藤に苦しむ生徒達は何を思い、どう変わっていくのか。自分に自信がもてない人、一歩を踏み出す勇気がもてない人、自分を変えたい人に、是非読んでほしい一冊だ。